

2025年 4月上旬

小久保は午前中に入所した特別養護老人ホーム「安らぎの里すずらん」の部屋にいた。彼は今年で七十五歳になっていた。二年前に長年共に歩んだ妻の洋子に先立たれ、埼玉の浦和にある自宅で一人暮らしを続けていたが、今年の一月に脳梗塞により、近隣の総合病院に入院した。治療後は状態も落ち着いたが、後遺症として左片麻痺となってしまった。入院中のリハビリ訓練も順調に進み、退院の目処が付き始めた。そこで、今後の生活をどうすべきかを病院と家族——家族といっても近い身内は一人娘の明子だけ——が本人を交え話し合った。体の左側が麻痺で動かない状態での生活を考えると、今まで通りの一人暮らしは困難との見方となった。しかし本人は自宅に帰り、一人で生活することを訴えたが病院のソーシャルワーカー、リハビリスタッフ、そして娘の明子から反対された。高齢者が片麻痺の状態でも一人暮らしを続けることは出来ないことではないが、日常生活において誰かしの支援が必要である。小久保の場合、自宅での生活をするためには別居している明子の協力が必要だが、明子は仕事を持ち、自分の家庭と仕事の両立で精一杯の状態であった。そこに小久保の介護を生活の中に入れることは現実難しく、明子のなかに小久保が自宅で生活する選択肢は考えていなかったのである。

結局、明子を選んだのは埼玉にある特別養護老人ホームであった。この特別養護老人ホームとは、日常生活で介護を必要とし、在宅（自宅）での生活が困難になった高齢者が入所する介護保険施設である。施設に入所すれば、二十四時間、専門職の目が小久保を見てくれる。明子にとってこれほど安心できる場所は他にないと感じていた。これにより小久保の終の棲家が住み慣れた我が家ではなくなってしまったのである。

また入所するには本人の意思を確認することが必要とされているが、小久保の場合は明子が半ば強制に近い状態で小久保に同意させた入所であった。小久保は今でもこの選択には納得していなかった。

「ここがお父さんの部屋になるのよ」明子が言った。

「どこが俺の部屋だ！」小久保は明子に食ってかかった。「俺の物が全くないじゃないか！いいか自分の部屋というものはな、慣れ親しんだ物が身の回りにある部屋を言うんだ。この部屋にはそれが何一つ無いじゃないか！」

明子は小久保の訴えを聞き流した。「私はこれから手続きをして、その後は仕事に行かないといけないから、もう行くね。分からないことがあったら職員さんに聞いてね」

「俺の部屋は浦和にある家だ！俺が建てた家だぞ！」

明子は小久保に背を向けると、部屋を出ようと歩き出した。

「おい明子！聞いているのか！」小久保は明子の背中に向かって怒鳴った。

「そうそう」明子が足を止め、小久保に振り返った。「お父さん、職員さんにわがままを言って困らせないでね」そう言うと明子は引き戸を開けて部屋を出て行った。

「洋子の写真を持ってこい！」

明子が出て行くと、小久保は部屋全体を見渡した。個室部屋は八畳ほどで、洗面所とトイレはあるが、キッチンや浴室はない。部屋には小さなテーブルとひじ掛け椅子が一つ、電動ベッドに箆笥とクローゼットがあった。また、ベッドのそばには小型の液晶テレビが乗った床頭台があった。浦和の家の部屋と比べものにならないくらい窮屈な環境に感じられた。

「まるでビジネスホテルじゃないか。こんな狭い部屋でどう生活しろというんだ」小久保は吐き出すように言った。

山口義雄は施設の正面入り口で足を止めて、自動ドアの右側の壁に取り付けてある施設名、安らぎの里すずらんの文字を目で追った。山口は大きく深呼吸をしたあと正面入り口に入り、スリッパに履き替えると受付で足を止めた。受付の奥は事務所となっており、受付にいる山口に気がついた女性職員が近づいて来た。首から掛けている名札には医事課、松下直美と書かれていた。松下は山口に挨拶をして用件を尋ねた。

「明日からこちらで勤務する山口です。本日制服を受け取りに来るように言われまして」

「承知しました」松下は笑顔を見せた。「担当の者を呼んできますのでお待ちください。

あ、それから検温と手指消毒をお願いします」松下はカウンターに置いてある検温器と手指消毒のボトルを指しながら言うと、その場を離れて行った。

山口は検温と手指消毒を済ませると、カウンター越しに事務所内をのぞき、松下を目で追った。松下はデスクに座っている女性に近づき話しかけ始めた。女性は松下の話の聞くと、デスクから離れ事務所から出てきて山口に近づいてきた。女性は白いブラウスにグレーのベストを着て、服装はシワやヨレヨレ感がなく、背筋を伸ばしながら歩く姿は、見る者に好感の持てる印象を与えてくれる。右手には大きく膨らんだ紙袋を持っている。

「初めまして、総務の秋野です」

山口は彼女の温かみのある笑顔により、自然と笑顔を作り挨拶を返していた。赤みのあ

るブラウンに染めたショートヘアが似合っている、山口は笑顔のままの秋野を見ながら思った。

「入職の前日にお呼び立てしまして、すみませんでした」

「いえ、大丈夫です」

秋野は紙袋を山口に差し出した。「こちらが制服になります」

山口は秋野から制服が入った紙袋を受け取った。

「本当なら」秋野が言った。「明日の出勤時に制服を渡せばわざわざ今日来ることもしなかったのですが、なにせロッカーがあまり大きくないもので、お渡しした制服全部をロッカーに入れるとそれだけでかなり場所を取ってしまいますから」

「気にしないでください」

「更衣室の場所をご存じですか」

山口は首を横に振った。「まだ施設内は見えていません。面接の時に事務長から勤務初日に施設見学をされると言われていたもので」

「そうですか。すみません、事前に見学できずに」そう言うと秋野はしばらく山口を見つめた後に言葉を続けた。「もしお時間があれば今から見学しますか、私がお案内しますよ。だって、わざわざ来ていただいて制服だけ渡して帰っていただくのも申し訳なくて」

「いや、気にしないでください。それに急に見学を入れたら大変でしょ。秋野さんだって忙しいのに」

「午前中ずっと数字とにらめっこしていたもので」秋野は事務所を横目で見た。「ちょっとした息抜きになります。事務所から出て新鮮な空気を吸いたい気持ちです」笑みを浮かべながら言った。

山口も笑みを浮かべた。「気分転換はとても大事ですね」

「そのとおり！」

山口は秋野の力を込めた言い方に少し驚かされた。

秋野は山口の驚いた顔を見て、クスッと笑うと山口もつられて小さく笑った。

「では見学する旨を事務長に伝えてきます。少々お待ちください」そう言うと、秋野は事務所内に入って行った。

山口は事務所のカウンター越しに秋野が事務所奥に向かって行くのが見えた。山口は秋野を目で追うと、その先に男がデスクにいるのが目に入った。秋野はその男の前で足を止めた。その男には見覚えがあった。山口が面接の際、話をした事務長の澤田だった。秋野

が話を始めたが、澤田はパソコンの画面を見続け一度も秋野に視線を向けずにいた。澤田が秋野に一言二言伝えた後、秋野は澤田から離れ、山口の方へ戻り始めた。

「お待たせしました。ではご案内しますね。あっそうだ、施設長にも山口さんが来たことを伝えないと。少々お待ちください」秋野は急ぎ足で廊下の先に向かい姿を消した。

しばらくすると、秋野が再び急ぎ足で戻って来た。「すみません、施設長は接客中で今は挨拶ができないそうです。見学が終わったら挨拶ができるかしれません」

秋野の沈んだ声に対して、山口は笑顔を見せてうなずいた。気にしないで。

山口は秋野の案内で施設内の見学を始めた。一階は事務所や厨房、浴室などがあり入居者の居室はなかった。

「ここは開設してから何年くらい経っているんですかね」山口が尋ねた。

「たしか開設から二十年以上経っています。古いタイプの施設ですよ」秋野が言った。「最近建てられている施設のようなプライバシーが尊重される個室のみのユニット型ではありません。個室部屋もありますが四人部屋が主の従来型です」秋野はエレベーターを指した。「では次に入所フロアをご案内しますね」

エレベーターの前に着くと、秋野がエレベーターのボタンを押そうとしたが、一旦手を止め、山口の方に体を向けた。

「山口さんは介護職をまとめる介護長として就任されたとお聞きしていますが、今までも高齢者介護の仕事をされていたのですか」

山口はうなずいた。「ずっと施設で介護をしていました。この仕事に就いて十五年以上になります」

「ベテランですね」秋野の表情に、あの温かみのある笑顔がでた。「介護を束ねる役として色々とスタッフに教えてあげてください」

山口は口元に笑みを浮かべた。「話がくどいと言われない程度に頑張ります」

「えー、話すとかどいんですか」秋野は笑いながら言った。「うちの施設では介護長という介護全体をまとめる役職は初めてなんです。それまでは施設長が介護職をまとめていましたが、施設長は看護師です。現場スタッフとしては同じ介護の資格を持った人にまとめてもらうのがいいと思います。身近に感じられるしね」

山口はうなずいた。確かに秋野さんが言うように同じ専門職が現場全体のまとめ役を務めることはいい。しかし、結局はまとめ役の人となり次第であり、そして互いに信頼できる関係性の構築が必要だ。その為にまずは俺が皆を信頼しなければならない。そして次に

皆が俺を信頼できるようなコミュニケーションやアクションをやらなければならない。

秋野がエレベーターのボタンを押すと、しばらくしてエレベーターが到着した。エレベーターのドアがゆっくりと開き、秋野がエレベーターに入ると操作ボタンの前に立ち、二階のボタンを押したあと、開くのボタンを押しながら山口にどうぞと声を掛けた。

山口がエレベーターに入ると秋野が言った。「では二階の入所フロアをご案内します」

エレベーターが動き始めると秋野がエレベーターの操作パネルを見ながら言った。「楽しみです」